

# 新しい時代の「ヨリアイ」その②

**玉城町**

における**歴史的建築物の利活用計画策定**

に関する**住民参加プロセス**について

皇學館大学 助教 **池山 敦**



発行所  
三重県地方自治研究センター  
三重県津市栄町2丁目361番地  
(一助)三重県地方自治労働文化センター内  
TEL059-227-3298  
FAX059-227-3116  
http://www.mie-jichiken.jp/  
info@mie-jichiken.jp

## 1 はじめに

本稿では、新しい時代の「ヨリアイ」としてのワークショップ（以下WSという）を活用した住民参加のプロセスについて、度会郡玉城町における「平成29年度玄甲舎利活用方策調査研究業務」に関し、皇學館大学との包括連携協定に基づく委託研究として筆者を中心に2017年度中に実施したものの中より、無作為抽出による参加住民を含む100人規模でのWSである「玄甲舎利活用100人委員会」について概観した上で、検討するものとした。

## 2 玉城町における玄甲舎修復・利活用プロジェクトについて

まず、玄甲舎とは正式には玉城町指定有形文化財（史跡）『旧金森家別邸「玄甲舎」（茶室）』といい、町作成のパンフレットによると、「弘化4年（1847年）、田丸城主久野丹波守（くのう たんばのかみ）の家老で畿内の茶人三傑の一人と謳われた金森得水によって設計・建築された金森得水別邸「玄甲舎」。



旧金森家別邸「玄甲舎」（茶室）

茶室・迎賓用を兼ねた数寄屋と、家族が生活を営む居宅で構成された数寄屋造りが特徴です。築後170年が経過していますが、建立時と大きな変化はなく、保存修復・整備によってほとんど当初に復元することが可能です。（中略）今後も復元・整備を進め、新しい地域文化振興の拠点施設として広く親しまれるように活用を考えています。「玉城町教育委員会2017」。「この建物は、金森家12代当主より町に寄贈され、2013年1月9日に町指定文化財となり現在にいたっている。町では寄贈されてから寄付を受けたことは是非、調査費用について、国や県などの文化財指定か活用か、修復費用の財源など様々な観点から町議会等においても活発な議論が行われてきた。

最終的に2017年2月「歴史・伝統文化を活かした多世代交流・魅力創造再生計画」として国から地域再生計画の認定を受け、地方創生拠点整備交付金の交付決定を受け、全体修復と利活用を進めることとなった。

玄甲舎の修復についての町の方針としては、最終的に「文化財の価値を保ち修復し、住民が活用する」というものとなり、そのために二つのフェーズが必要となった。まずは、文化財の価値を保ち修復することである。これについては2015年度に調査を行い、翌2016度に修復の設計と見積もりを行い2017年度に修復工事を実施している。こちらの作業は高度に専門的な文化財の修復であり、事の是非を除き一般住民の意見を聞くという余地はあまりないといつてよい。しかし、反対にもう一つの「住民が活用する」というフェーズに関しては、利活用の当事者である住民の声を広く聞く必要がある。ここに地方創生を担当する部局である総合戦略課は大きな意義を見出している。いわゆる箱物を整備しただけで簡単にまちが賑わうというような事は現在では考えにくく、ハード整備をきっかけにいかに関民のまちづくりへのコミットを増やし人口減少社会におけるまちづくりの起爆剤とするかが、今回の玄甲舎利活用プロジェクトを地方創生から見た大きなテーマとなっている。このことに関して山崎は「いい空間をつくるだけで人々が集うというこ

とがほとんどなくなった。むしろ重要なのは、弱体化した地縁型コミュニティの代わりになんかコミュニティが屋外空間を使いこなすのか、ということである。まちを賑やかにするために、斬新な広場のデザインが必要なのではなく、斬新な広場のマネジメントが必要なのである。「山崎 亮 2012」と述べている。

今回のプロジェクトはこの「広場のマネジメント」に住民参加を促し、住民がプレイヤーとなり多世代が集う「新しい広場」を作り出すことに大きな目的があるといえる。

### 3 WS実施計画

WSの実施について筆者に打診があり、利活用の所管である総合戦略課と実施についての調整を行うこととなった。その中で、(1)10回程度継続的に行うこと(2)WSの参加者には一部無作為抽出による住民を含むこと、などが合意され2017年6月初旬に大学との間で委託契約を行った。

図表1に今回のWS実施計画を示す。実施計画ではWSを前半、後半にわけ、キックオフとしての第1回、そして総まとめとして最終の第10回に、一部無作為抽出住民を含む「玄甲舎利活用100人委員会」を行うこととした。そして多様な参加を確保するため、大学生と町役場の若手職員による「ヨソモノ・ワカモノ」WSを第2回に、テーマ

前 半	テーマ別 委員会	1) 第1回玄甲舎利活用100人委員会 (8月19日)
		2) ヨソモノ・ワカモノワークショップ (8月25日)
		3) 郷土愛を育む町の寺子屋 (9月11日)
		4) 住民の健康をつくる集いの場 (9月14日)
		5) 集客交流を促進させる魅力発信拠点 (9月19日)
後 半	6) まちづくり講演会 (12月12日)	
	7) ビジネスモデル案検討 その1 (12月21日 午後)	
	8) ビジネスモデル案検討 その2 (12月21日 夜)	
	9) ビジネスモデル案 最終検討 (2月1日)	
	10) 第2回玄甲舎利活用100人委員会 (3月3日予定)	

【図表1】WS実施計画

### 4 住民参加のデザイン

#### ① 先行事例1

「100人委員会」としての住民参加のデザイン先行例として、ふた

別委員会として町内の文化団体から広く参加者を募集し第3回〜第5回を行った。玄甲舎の利活用に関しては2018年度以降に「地域運営組織」での管理運営を念頭に置いているので、最終的に運営の中心になりうる実際のプレイヤーが見えてくるように意図している。後半には、別事業でコンサルタント会社の作成する収支シミュレーションと中期事業計画をもとに「事業」として検討するフェーズを徐々に増やしていき、全体として大きく「拡散」から「収束」へ向かうようにデザインした。

つの例をみてみることにする。まず一つ目は「京都市未来まちづくり100人委員会」である。その目的は「未来の京都を築くために、市民の皆様が主体的に運営する中で、まちづくりについて、白紙の段階から議論し、行動、実践する「京都市未来まちづくり100人委員会」(中略)を設置する「京都市総合企画局総合政策室市民協働推進担当2018」とされている。

京都市未来まちづくり100人委員会は、2008年9月から2015年まで5期にわたって編成、さまざままちづくり上の課題を題材に市民参加の新たなスタイルを提案してきた。

「ぎょうせい 2013・04」によると、1〜3期ではNPO法人が事務局を担い、委員はすべて無報酬のボランティアが担い、定例会議を毎月第4土曜日の午後にもち、「ひとつをたぐ福祉のコミュニティづくり」「歩きやすい道」などの分科会に分かれて継続的に討議を行ったという。

2012年からスタートした第4期においては「京都・未来まちづくりミーティング」と題して無作為抽出の市民100人規模での討議を実施している。参加者は「住民基本台帳から無作為で選出した京都市民7000人」「10歳代(高校生以上)70歳まで、各世代から1000人ずつを選出(男女同数)」、選出した市民に送付した招待状への返信数561件(そのうち参加希望150

件)、参加の有無とは別に「今後100人委員会の情報提供を希望」245件、参加者数・延べ108人「特定非営利活動法人京都NPOセンター 2014」であった。ミーティングの結果をうけ、16の重点テーマを決定しその後の100人委員会での話し合いにつなげていったという「ぎょうせい 2013・04」。各期の100人委員会の活動については詳細な報告書にまとめられ、WEBでも公開が行われている。このミーティングの特徴として「参加者を無作為で選出すること、従来の「公募」による場合とは異なり、市民参加に熱心な市民の集まりとは違う「京都市民の縮図」としての参加者が集まっています「京都市 2018」とされているが、これは今回玉城町における100人委員会の意図と合致している。

#### ② 先行事例2

もう一つの事例として、鳥取県智頭町における「智頭町百人委員会」を見ることにする。その設立趣旨は「智頭町の自立度を高めて、活力ある地域づくりを進めていくためには、町政へ住民の皆さんの声を反映していくことが必要であることから、2008年「智頭町百人委員会」が設置されました。百人委員会は、住民が身近で関心の高い課題を話し合い、これを解決するための政策を行政に提案していく組織であり、智頭町ならではの住民自治の実践をめざします「智頭町 2018」同

サイトによると2017年度は延べ96名の委員が登録している。

智頭町百人委員会設置要綱第2条によると「委員会は、智頭町内における各種政策等について意見を町長に述べることとする。」とあり、第3条により「商工・観光部会以下7部会に編成されている。また、「第7条(略)2町長は、企画提案会で提出された内容を精査した上で、これを尊重し、智頭の地域の発展と住民福祉の向上のため、町政に反映させるものとする。3委員は、企画提案した内容について、「自立と持続を推進するまちづくり交付金」などを活用し、住民主体で事業を展開するものとする。」[鳥取県智頭町2018]としており、「自分ごと」としてまちづくりに取り組む町民の姿を示したうえで住民、行政双方に責任を持たせている。

現在でも取り組みは続いており、詳細な報告書が同サイトにアップされているとともに、町民に対する周知として、「広報ちづ」に各部会の報告が掲載されており、2018年1月号には「健康部会だより④」などが掲載されている。

③ 玄甲舎利活用100人委員会における無作為抽出住民の参加

今回、玄甲舎利活用100人委員会を実施するにあたり、玉城町との協議をする中で当初から次のような合意をしていた。所謂「まちづくりWS」を実施する際に参加者の公募をかけるという顔ぶれが集まっ

てしまうことが多い。実際にWSに参加できる時間が確保できるかどうか、興味関心があるか、などいくつかの理由があると考えられる。しかしその「いつもの顔ぶれ」でWSを行ったことでは「住民から広く声を聴いた」とはいえないであろう。そこで、今回のWSには無作為抽出による住民参加のプロセスを組みこむことにした。この点は前述の京都市の「京都・未来まちづくりミーティング」と意図を同じくしている。そこで今回の100人委員会における無作為抽出の住民参加を次のように計画した。

- 1) 2017年6月1日現在の満20歳以上の59歳の町民を住民基本台帳より抽出
  - 2) 系統抽出法により300名の候補者を抽出
  - 3) 2017年7月10日返信ハガキを同封しWS開催案内を送付
  - 4) 同年7月31日返信締め切りとする(2018年2月1日現在、同様のプロセスで第2回100人委員会の参加者を募集中である。)
- その結果は図表2の通りであった。

先行事例①でとりあげた、第4期京都市未来まちづくり100人委員会にて2012年に実施された「京都・未来まちづくりミーティング」の数字を比較対象として示す。杉岡は「京都市未来まちづくり100人委員会」の課題について、3つの

	玉城町玄甲舎		京都	
人口	15,641		1,475,183	
発送数/対人口比	300	1.9%	7,000	0.5%
返信数/対発送数	163	54.3%	561	8.0%
参加/対発送数	11	3.7%	108	1.5%
※人口に占める100人の割合	0.639%		0.007%	

【図表2】京都市未来まちづくり100人委員会との比較

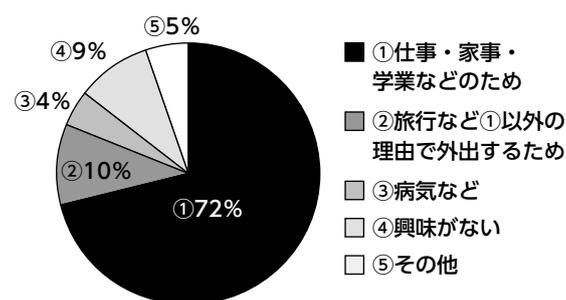
検討すべき課題があるとした中で「一つは『参加者の量的課題』である。すなわち、100人(実際は100名をを超えている)の市民が参加している数字は約147万人いる京都市民から見れば、0.014%に過ぎない。(中略)100人委員会の実施だけで市民協働の量的拡大には限界がある。[杉岡秀紀2016]と指摘している。

京都市未来まちづくり100人委員会には、実質200人が参加しているが、比較のため図表2では人口に占める100人の割合で示している。改めて玉城町での100人委員会を見てみると、案内状を送付した300名は人口の1.9%であり、玉城町の人口に対する100人のウェイトは0.639%と、この方法は杉岡の指摘する量的な視点で見ると政令都市などよりも小規模自治体に向いているといえる。また、返信率に關しても玉城町の場合半数を超える54.3%となっており、京

都市のものとは比べても高水準であることがわかる。今回はがきに返信者の氏名をあらかじめ差し込み印刷を行うなど、なるべく住民の負担を減らすという役場担当者の気配りが功を奏したものとはいえるかもしれない。

今回、返信ハガキに欠席の場合に欠席の理由を尋ねる項目を設定しており、その回答をグラフ化したものがある。多くは①の「仕事・家事・学業などのため」で72%をしめるが、④の「興味がない」も13.9%をしめていることは見逃せない。やはり、地方自治に対する無関心の層が一定程度見られることは否定できない。

今回の100人委員会については、無作為抽出住民だけでなく、町内の各種団体に声をかけて参加者を募集した。その際に団体の選定に



【図表3】欠席の理由

属 性	参加者数
自治区長 (招待者)	18名
文化協会、各種団体 (招待者)	66名
一般公募住民	17名
無作為抽出住民	10名
その他 (学生など)	4名
合 計	115名

【図表4】各種団体内訳

参加の呼びかけを行った。その結果115名の参加となったが、内訳は図表4のようであった。

今回のWSに関しては、多くの部分において「フューチャーセンター」という概念を取り入れている。フューチャーセンターとは「未来を創造する対話の場」であり、企業・政府・自治体などの組織が、中長期的な課題解決を目指して、様々な関係者を幅広く集めて、協動的かつ創造的な対話を通じて、新たなアイデアや問題の解決手段を見つけたし、その実現や実践での相互協力を促す「堀内一水 2012」す場であり、特定少人数の専門家で構成される委員会ではなく、多様かつ多数の参加を促すことにより、多くの暗

あたっては、「第5次玉城町総合計画・後期・基本計画」を策定した際にヒアリングを行った団体やベースにした。自治区、各種文化団体、ボランティア団体、健康・食育、地域福祉、農業、商工業、子育て、高齢者福祉等をはじめとする109団体に

黙知を結集させることに重きを置くものである。

「単なる形式的な「住民説明会」などでなく、住民と一緒に計画からできないか。住民も行政にまかせっぱなしにしたり単に文句を言うだけでなく、主体的に責任をもって関わる。行政や専門家はそれを踏まえて専門的な見地から計画を具体化する。そんなプロセスの中でいろいろな立場の人の心が通うコミュニティを再生し、明るく豊かな地域社会を構築しなおそう」「中野民夫2001」。まさに、この点から今回の玉城町における住民参加プロセスはデザインされた。

### 5 第1回玄甲舎利活用100人委員会の実施

#### ①えんたくん

今回の100人委員会のプログラムデザインにおいては「えんたくん



「えんたくん」を活用したWS

ん」(商品名、販売元有限会社 三ヶ日紙工)を使用した。これは円形の段ボールで、参加者の膝の上のせ、その上に専用シートを重ね、直接円卓に對話の内容を書き込みながら使用するツールである。経験上「円」という形状と「膝に乗せる」という使用法について好意的に迎えられることが多い。WSの現場では、講義スタイルのように全員が同じ方向を向くのではなく、テーブルを囲んで座り、チームとして共同作業を行うことに意味を見出す。

また、出た意見をもつ場で書き留めていくことも重要である。「せっかくできてきたアイデアや議論の核を、ただ話しっぱなしにしたり、書記や主催者が自分のノートにメモをとるだけでなく皆の目の前に皆が読める形で大きく書き留めていくことは、議論の無用な繰り返しが減り、きちんと積み重なっていくために大切なことだ」「中野民夫2001」。今回は、すべての参加者に水性マーカーをもっていただき、自分の意見を自分で書き留めながら話すこと、またほかの人の意見を聞いているときに、良いと思つた意見を積極的に書き留めていくことを推奨した。また、このえんたくんシートはそのままグループでの話し合いの内容を共有する際にも使用できる。今回の委員会では口頭での発表を行わず、シートを壁に掲示する等して参加者が見て回る「ギャラリ」という形式で全体での共有を行った。経験上WSにおける口頭発



壁に掲示し、全体での共有を行う

表を参加者は負担に感じることも多く、「今日は発表を行います」というだけで、参加者に安堵の色が見えることも多い。

#### ②プログラムデザイン

今回のWSは次のような進行で実施した。

- 13..30 司会挨拶(司会、町長より挨拶)
- 13..35 玄甲舎復元プロジェクトについての説明(総合戦略課)
- 13..50 進行ルールなどの説明
- 14..00 自己紹介タイム
- 14..05 「えんたくん」を利用した意見交換
- テーマ①玉城町の良いところ、残念なところ
- 14..35 休憩
- 14..45 「えんたくん」を利用した意見交換
- テーマ②良いところを伸ばし、残念

などところを克服するための  
 玄甲舎の利活用方法  
 15…10 ギャラリー  
 15…25 司会挨拶

当日は冒頭に玉城町総合戦略課から玄甲舎復元プロジェクトについての概要を説明した上で、フアシリテーター（筆者）より「玉城町玄甲舎利活用住民参加WS（全10回）」の全体の主旨と組み立てを伝え、本WSの目指すところ、進め方等を説明した。その後、前述の「えんたくん」を各グループに配り、話し合いがスタートした。まずはグループ内での自己紹介を行う上で知らない人同士が話すきっかけをつくるためのコミュニケーションカード「あの街この街カード」（オリジナルツール）を活用し、活発な話し合いができる雰囲気づくりを行った。

WS前半では「あなたの思う玉城町のよい点、残念な点」をテーマに話し合った。えんたくんのシートに「よい点」「残念な点」を書くスペースをあらかじめ区切っておいたものを用意し、参加者が1人1本ペンを持って、それぞれの思いを話しながらシートに書き込んでいった。よい点としては「町産の野菜や果物、肉がおいしい」「多世代世帯が多い」「温泉がある」「熊野古道の出発地点」などの意見があり、残念な点としては「図書館が小さい」「昔ながらのお店に活気がない」「田丸駅がさびれている」「交通の便が悪い」など、それぞれの思いを話しながらシートに書き込んでいった。



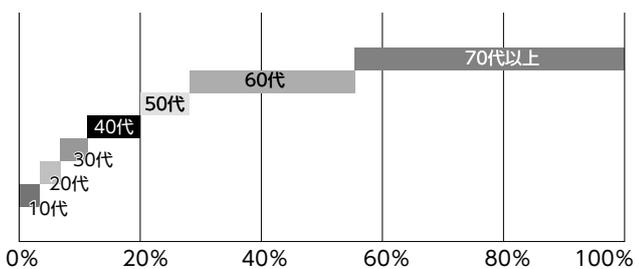
WS後半では「よいところを伸ばし、残念な点を克服するために玄甲舎をどう使えばいいでしょうか」というテーマで意見交換した。前半に考えた意見を眺めながら、玄甲舎が町民に愛される施設になるような利活用のアイデアを話し合った。「子供向けのお茶教室」「観月会を開く」「カフェスペースをつくり町民の憩いの場に」「庭園を活用したミニコンサート」など様々な意見やアイデアが生まれ続けた。

WSの最後は、グループを越えた参加者同士の交流の時間を設けた。展示会のように、書き込んだシートを壁や椅子の上に展示し、各グループで話し合った内容を眺めながら、自由に対話を行った。和やかな雰囲気の中、他のグループの参加者同士がそれぞれの玉城町への思いや希望を生き生きと語り合い、交流が生まれていた。

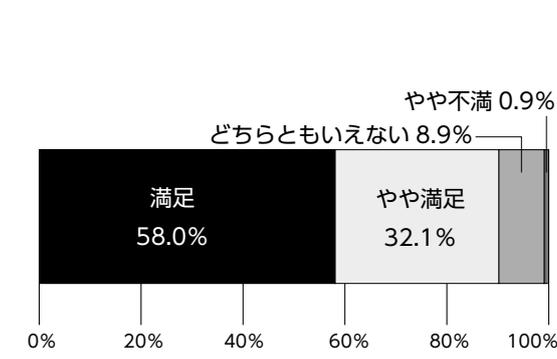
6 アンケート結果より

今回のWSでは全回において、次の8項目の参加者に対するアンケートを実施している。項目は①性別②年代③居住地区④職業⑤WSに対する満足度（5段階）⑥満足度に関する理由（自由記載）⑦第2回玄甲舎利活用100人委員会に対する参加意向⑧そのほか自由記載、である。

有効回答は114名で男女は57名ずつの同数であった。年齢別にみると70代以上が44.7%と最も多い。年齢別の組成は図表5の通りである。ここに現在のまちづくりにかかわる人材の高齢化の課題が見取れる。現役世代は仕事、子育てなどに忙しく、まちづくりなどに時間



【図表5】参加者の年齢構成

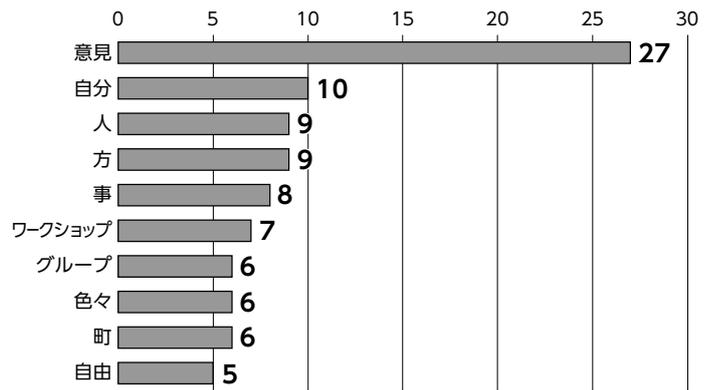


【図表6】WSの満足度

を使える世代はリタイヤ世代、特に70代であり、次の世代の育成が課題となっていることが多い。町内の地区別で見ると、玉城町の4つの小学校区と町外として分けているが、玄甲舎の立地する田丸地区が最も多く約半数を占めている。また職業別で見ると、前述の年齢層の影響か、「働いていない」が30%で最も多くなっていた。

満足度に関しては、「満足」「やや満足」で90%を超え、おおむね満足との結果であった。その中で、今回のアンケートでは「満足度の理由」を自由記載で聞いており、それについてテキストマイニング処理を行った。分析には富士通エフ・アイ・ピー・システムズのテキスト型データ解析ソフトウェア「Word Miner®1.5」を使用した。

分析は、使用頻度の高いキーワード



【図表7】 テキストマイニング

ドを抽出したうえで、そのキーワードが前後どのような文脈で使われているのかを再度検索した。その結果、最も多く使われていたキーワードは「意見」であり、「満足」「や満足」と回答した参加者101名のうち27名が33回使用した。次に自分(10人)、「人(9人)」と続いている。最頻出の「意見」というキーワードが33回使用されているうちの19回で「意見を聞く」「意見を見る」という内向きの方向性、9回が「意見を言う」「意見を出す」などの外向きの方向性の文脈で使用していた。総じて、活発に意見が交わされたことに満足度を覚えている参加者が多く、そのことが満足度を上げる

要素であることが推察できた。

### 7 まとめ

本稿では、小規模自治体におけるWSを利用した住民参加プロセスについて、玉城町における文化財の活用に関するWS「第1回玄甲舎利活用100人委員会」を例に概観してきた。その中で次の2点を指摘しておきたい。

まず一つ目に、今回行った「玄甲舎利活用100人委員会」のように無作為抽出住民を含む住民参加ワークショップを活用した住民参加の方法は、小規模自治体に適しているということである。これは、前述の杉岡の指摘にあった「量的課題」をクリアするからである。

次にアンケート結果の分析などにより、今回のようなWSスタイルによる住民参加は、参加住民に好意的に受け入れられるということである。特に、参加者同士による意見の交換について好意的に受け入れられることが自由記載のテキスト分析から推察できた。委員会などの閉じた場ではなく、オープンな場において住民同士が意見交換を行い、自分たちの町の未来を考えあう「自己決定」のプロセスへの賛同であると考えたい。

先に述べたように、量的な課題、地方自治に関する住民の参加における無関心等の課題は多い。しかし、「せっかくなの住民参加を促進しよう」という息吹は、(中略) 住民社会を

成熟させ、真に豊かな社会を築くうえで途絶えさせはならない。」  
〔中野民夫 2001〕  
われわれは、かつて経験のない人口減少社会の入り口に立っている。そして、この経験したことのない社会は今後加速度を速めながら進行していく。その中であって、住民自身や自治体がいかに在るべきかを「自己決定」していかなければならない。そして多くの市民の声を聴くことのできる新しい時代の「ヨリアイ」の形を模索し続けていく必要がある。

### 引用文献

ぎょうせい(2013・04) 公共の新たなプラットフォームを目指す京都市未来まちづくり100人委員会 月間ガバナンス'89-91

京都市(2018年1月24日) 無作為で選出した市民が京都の未来について議論する「京都・未来まちづくりミーティング」の実施について 参照先：京都市情報館：http://www.city.kyoto.lg.jp/sogov/page/0000125423.html

京都市総合企画局総合政策室市民協働推進担当(2018年1月1日) 京都市情報館 参照先：http://www.city.kyoto.lg.jp/sogov/page/000042757.html

玉城町(2017) 地域再生計画

玉城町教育委員会(2017年3月) 玉城町指定文化財玄甲舎 金森得水別邸(茶室) 竹まいに秘めた歴史

山崎 亮(2012) コミュニティデザインの時代表 自分たちで「まち」をつくる中公新書

杉岡秀紀(2016) 京都市におけるフューチャーセンターを活用した次世代市民協働政策の一試論 同志社政策科学研究

智頭町(2018年1月8日) 智頭町百人委員会 参照先：鳥取県智頭町ホームページ：http://cms.sanin.jp/p/chizu/kikaku/mezasu/4/

中野民夫(2001年1月19日) ワークショップ 岩波書店

鳥取県智頭町(2018年1月8日) 智頭町百人委員会設置要綱 参照先：鳥取県智頭町ホームページ：http://cms.sanin.jp/system/site/upload/live/10479/atc\_146764471.pdf

特定非営利活動法人京都NPOセンター(2014年3月31日) 第4期京都市未来まちづくり100人委員会事業報告書

堀内 一永(2012) フューチャーセンター「未来を創造する対話の場」横浜市調査季報 48=49

### プロフィール

いけやま あつし  
**池山 敦**

皇學館大学 教育開発センター 助教  
地(知)の拠点大学による地方創生推進事業として、学生フューチャーセンター「皇學館みらい対話団」を発足。また、2014年「みえの少子化対策を考えるフューチャーセッション」ではファシリテーターを務める。2015年には度会郡玉城町 地方創生会議の委員も務める。三重県地方自治研究センター「フューチャーセンターの社会実装に関する研究会」 座長



ページ：http://cms.sanin.jp/p/chizu/kikaku/mezasu/4/

中野民夫(2001年1月19日) ワークショップ 岩波書店

鳥取県智頭町(2018年1月8日) 智頭町百人委員会設置要綱 参照先：鳥取県智頭町ホームページ：http://cms.sanin.jp/system/site/upload/live/10479/atc\_146764471.pdf

特定非営利活動法人京都NPOセンター(2014年3月31日) 第4期京都市未来まちづくり100人委員会事業報告書

堀内 一永(2012) フューチャーセンター「未来を創造する対話の場」横浜市調査季報 48=49